

# フィリピン・レイテ島における農村の 就業構造と畑作農業経営について

安 食 和 宏

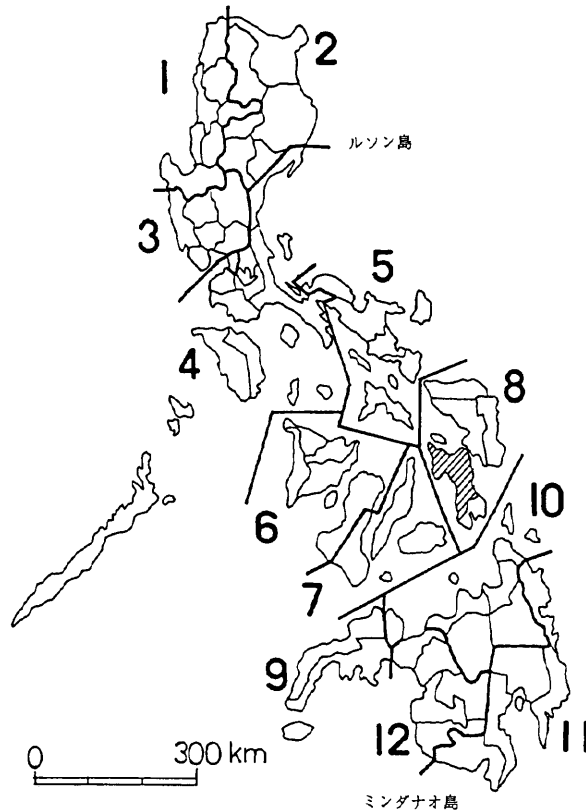
**【要旨】** フィリピン・レイテ島の一村(Barangay Rawis)において、世帯の就業構造と農業経営内容に関する調査を行なった。その結果、以下のような点が明らかになった。まず世帯員の就業状況を見ると、農業(雇われ労働を含む)と1次産品関連の仕事に従事している例がほとんどであり、都市域への通勤者はほとんどみられない。また農業経営においては、耕地の貸借において定額契約がみられず、全て分益小作制であること、多様な作物の作付がみられるが化学肥料の使用率は低いこと、そして農業機械が全く用いられておらずカラバオ(水牛)の有無が非常に重要であること等の特色が認められた。これらは対象地域の農業の、いわゆる「後進性」を示すものである。

## 1. はじめに

フィリピンにおける農業経営の実態や農村の社会経済に関しては、経済地理学的あるいは農業経済学的な研究に限ってみても、ミクロな現地調査に基づく研究がすでに相当数認められる。その中で第一に注目されてきたのは、ルソン島を中心とする米作農村である。例えば、伝統的な稲作経営と農村社会の構造については、高橋(1969)等の詳細な研究事例があり、また1970年代以降の技術革新、いわゆる「緑の革命」に伴う農業と農村の変容については梅原(1978, 1992)等が論じている。そして最近では、フィリピンの農業発展政策の主眼が米の増産から農業経営の多角化やトウモロコシ生産の増大へと移るにつれ、梅原(1992)の研究にみられるように、南部のミンダナオ島を中心とするトウモロコシ地帯が注目されるようになってきた。その他に永野(1983)のようなサトウキビ地帯の研究事例もみられるものの、これまでの研究は主に米とトウモロコシを中心に扱ってきたわけで、地域的には大体ルソン島とミンダナオ島が対象になってきたといえる。その一方で、これら両者の中間に位置するピサヤ諸島や、あるいはルソン島南東部のピコール地方については、「周辺部農業地帯」や「畑作地帯」という位置づけがなされてきたものの(梅原, 1992; 国際農林業協力協会編, 1987)、その実態把握を試みた研究はあまり多くない。筆者は、このような周辺地域における農業生産の実態、農村の就業構造の特質とその変容、あるいは農村・都市間の労働力移動等について把握するために調査研究を進めていきたいと考えている。本稿ではそのための第一歩として、レイテ島の一農村を対象として行なった予備的な調査の結果を報告し、今後の研究の方向を探ることとしたい。調査した項目は、世帯員の就業状況、農地の所有と貸借関係、栽培作物の種類、そして農業生産技術等である。

## 2. フィリピン農業の地域的特性

フィリピンの農業を代表する作物は、米、トウモロコシ、ココヤシであり、これらは「三大作物」と称されている(梅原, 1992)。つまり、1986年の統計でみると、フィリピン全体の農産物収穫面積の中で、これら3種を合計すると約84%を占めている(Center for Research and Communication ed., 1988)。そして、これらの作物の主産地が地域的に大きく異なっていること、すなわちフィリピン農業では地域ごとの特性がかなり明確にみられることも注目される。梅原(1992)は、1971年農業センサスのデータを用いて、州ごとに作付率1位の作物を抽出することにより、フィリピン全体を大きく、「米作地帯」「ココヤシ地帯」「トウモロコシ地帯」の3つに区分している。それによると、ルソン島(南東部を除く)と西部ビサヤ地方が「米作地帯」であり、ルソン島南東部から東部ビサヤ地方にかけてが「ココヤシ地帯」、そして中部ビサヤ地方とミンダナオ島が「トウモロコシ地帯」となっている(第1図参照のこと)。

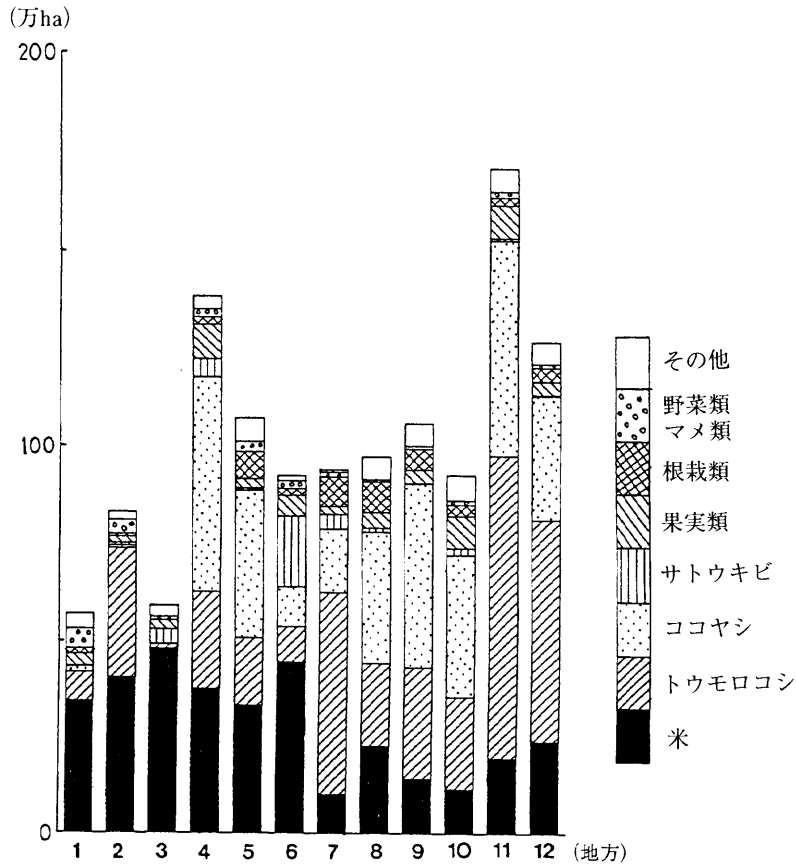


第1図 フィリピンの行政地域区分

太線が地方の境界、細線が州の境界

地方名. 1:イロコス, 2:カガヤンバレー, 3:中部ルソン, 4:南部タガログ,  
5:ビコール, 6:西部ビサヤ, 7:中部ビサヤ, 8:東部ビサヤ, 9:西部ミンダナオ,  
10:北部ミンダナオ, 11:南部ミンダナオ, 12:中部ミンダナオ  
斜線を施したのがレイテ州

これにより、フィリピン農業の地域特性の大枠を把握することは可能であるが、最大作付率の作物のみで議論するだけでなく、他の作物も合わせて同時に捉えることがより適切であると思われる。ここでは、地方（計12）別に作物別収穫面積を計算してまとめてみた（第2図）。これによると、ルソン島の1地方や3地方はまさに「米作地帯」として捉えることが

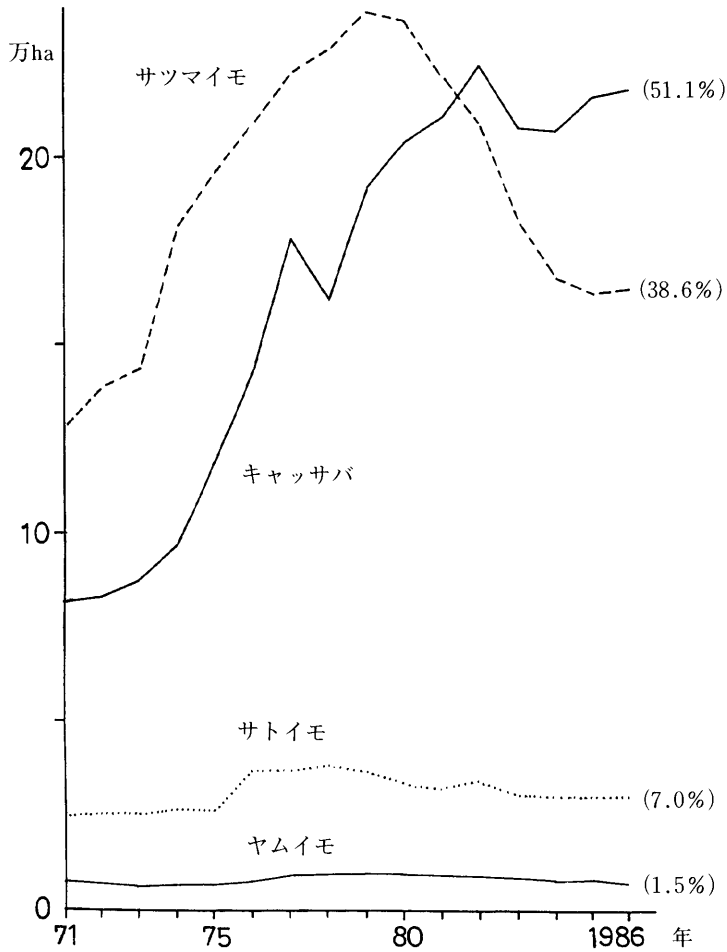


第2図 フィリピンの各地方ごとの作物別収穫面積 (1986年)

Center for Research Communication (ed.) (1988) : *Philippine Agribusiness Factbook and Directory 1987-1988*のデータより作成

できる。しかし、ミンダナオ島については、「トウモロコシ地帯」というよりも、「トウモロコシ+ココヤシ地帯」としてとらえるべきであろう。さらに5地方（ビコール地方）や8地方（東部ビサヤ地方）については「ココヤシ地帯」ではなく、むしろ多様な作付がみられる「多種作物地帯」とでも呼んだ方が適切である。つまり、第2図に示されたように、これらの地方では、米、トウモロコシ、ココヤシの3種とも収穫面積が大きく、さらに根栽類のシェアも小さくない。本稿で対象とするのは、こうした「多種作物地帯」である。具体的な記載に入る前に、対象地域の位置付けを明確にしておく。

また第2図より読み取れることは、根栽類に注目してみると、その生産が5、7、8地方



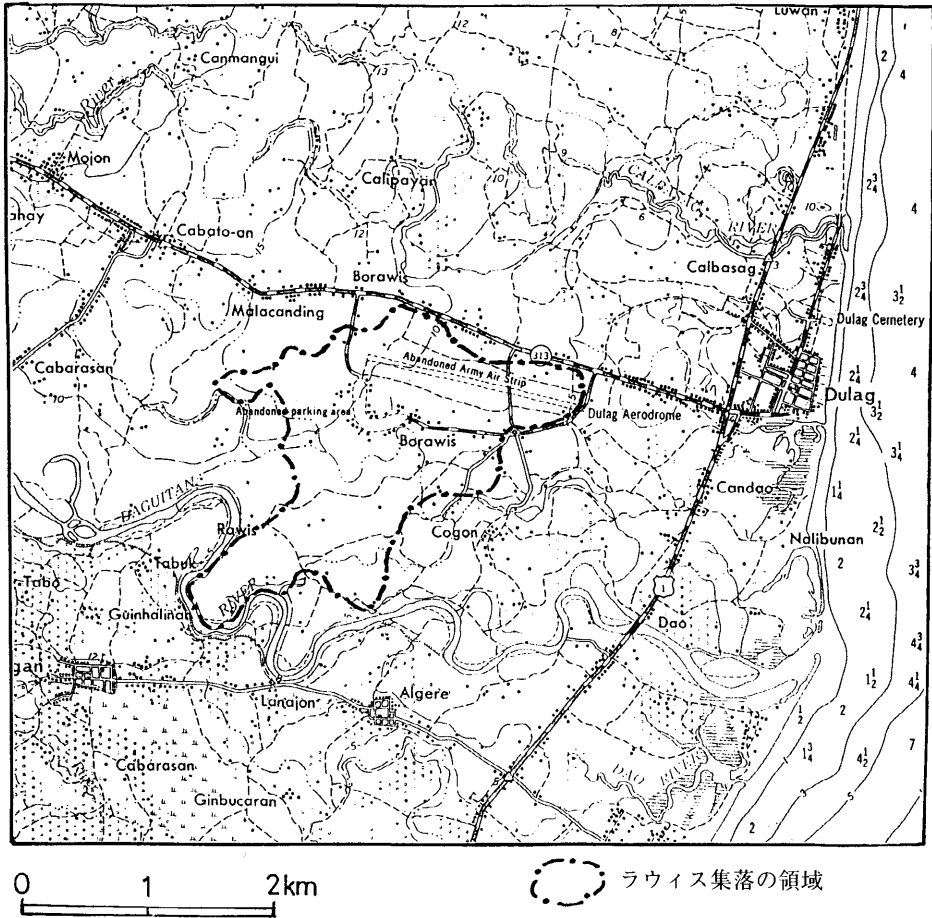
第3図 フィリピンにおける根裁類の収穫面積の推移  
 国際農林業協力協会編(1987):『フィリピンの農業—現状と開発  
 の課題—』の資料より作成 ( )は1986年の構成比

に集中しているということである。フィリピンのイモ類生産に関する研究は決して多くないので、参考までに、フィリピンにおける根裁類の収穫面積の推移を第3図に示した。第3図より明らかなように、イモ類の中で収穫面積が大きいのは、キャッサバ(cassava)とサツマイモ(sweet potato, 現地名 camote)である。この両者を合わせると全体の約9割を占める。また、これら2種の生産の推移をみると、1970年代に収穫面積が大きく拡大したことがわかる。これは後述するように、家畜の飼料用としてイモ類を加工する技術が開発され、その需要が増大したことに対応していると思われる。

### 3. 対象地域の概観

今回の調査の対象として選定したのは、レイテ州のドゥラッグ町(Municipality of Dulag)の中のラウイス集落(Barangay Rawis)である。この集落は、レイテ島中部の東海岸から約3kmの平地に位置している(第4図)。この集落からドゥラッグ町の中心市街地まで約3km、

そこからレイテ州の州都タクロバン市（人口約14万人）まで約40kmの位置にある。また第4図に示されたように、この集落にはかつて旧日本軍が滑走路を建設したという歴史もある。

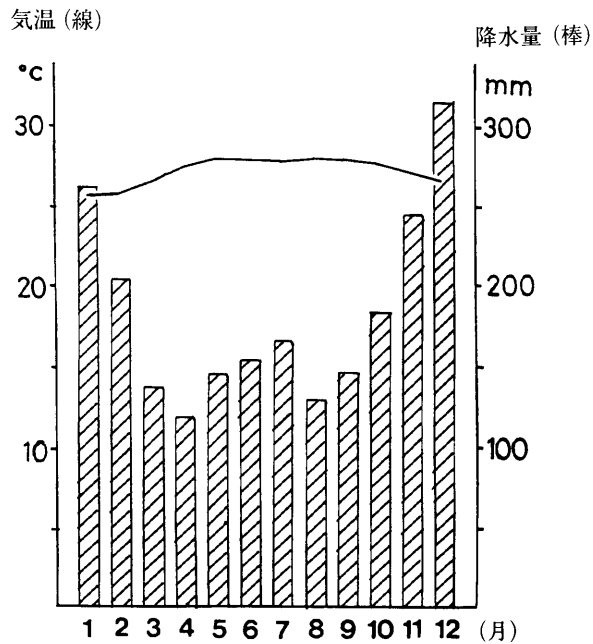


第4図 対象地域

5万分の1地形図「Burauen」の一部、1950年頃に撮影した空中写真によるものと思われる

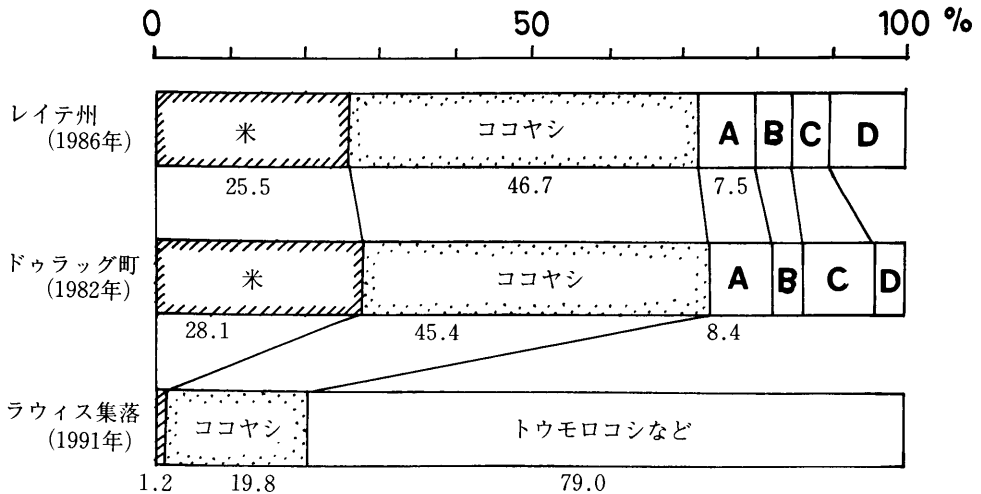
タクロバン市の気温と降水量の状況を第5図に示した。これによると、まず平均気温は年間を通してほとんど変化していない。そして降水量については、月ごとの変化があるものの、1年を通して毎月ある程度の降水がみられる。年間降水量は2215mmに達する（National Statistics Office, 1990 a）。そして、対象地域の農地における作物構成比をまとめたのが第6図である。ラウイス集落の土地利用については詳細は不明であるが、レイテ州全体、あるいはドゥラッグ町の状況と比較してみると、この集落における米作の少なさが明らかである。この地域は元々水の便がよくないという話であり、対象地域は、いわば典型的な「畑作地帯」として捉えてよいであろう。

1990年の人口センサスによると、ラウイス集落の人口は913人、世帯数は167世帯を数える（National Statistics Office, 1990 b）。それが1992年の集落の資料では、940人、250世帯へと増加しているが、これには、1991年11月の台風により家を失って近隣集落から当集落へ約



第5図 レイテ州都タクロバンの気候グラフ

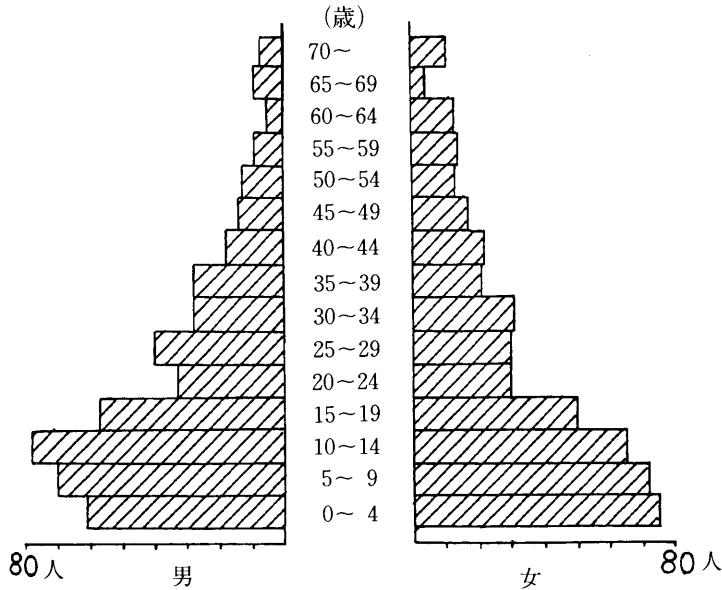
National Statistics Office (1990 a) : *Provincial Profile - Leyte* - の資料より作成



第6図 農地における作物構成比の比較

A : トウモロコシ, B : 果実類, C : 根栽類, D : その他  
農業省・町役場・集落の資料による

50戸が移転してきたという事情がある。1992年の人口ピラミッドを作成すると、第7図のようになる。これによると、男女とも、10代前半までの人口に比べて10代後半から20代前半にかけて人口規模が縮小している。このことより、学校卒業後に都市部へ移動する事例が相当多いと考えてよいのでなかろうか。なおこの点については後に述べる聞き取り調査でも確認されている。



第7図 ラウイス集落の人口ピラミッド (1992年)  
集落の資料による

#### 4. 集落の就業構造

##### (1) 世帯のタイプ

ラウイス集落の世帯を幾つかのタイプに分けて整理することから始めてみよう。台風のため避難してきた約50戸を除いた計200戸についてまとめてみると、第1表のようになる。これは概数を示したものであるが、集落を構成する世帯の特色についておおよそ理解できるであろう。まず、耕地を保有し（小作を含む）農業を営んでいる農家は計95戸を数える。そのうち最も多いのが小作農家（tenant）で、次が自作農家である。なお、ここでいう「tenant」とは、契約相手の地主がほぼ固定しており、その地主に対して経済的にも身分的にも従属している小作農家を指す。一方「lessee」とは、毎年契約する地主が変わり得る、地主に対して身分的に従属していない農家を指す。これらの農家の他に、非農家が存在する（第1表）。それらの内訳をみると、農業労働者世帯と耕地貸付・非農家が多い。

結局、ラウイス集落においては、耕地の貸借と労働力の雇用・被雇用関係がかなり頻繁にみられる。耕地の貸借関係につい

第1表 ラウイス集落の世帯タイプと土地所有

世帯のタイプ	世帯数 (概数)	所 有 耕 地 (概数)	経 営 耕 地 (概数)	平 均 経 営 規 模
自 作 農 家	30	90	90	3.0
自 小 作 農 家	5	10	20	4.0
小作農家 (tenant)	50	—	70	1.4
ク (lessee)	10	—	50	5.0
農 業 労 働 世 帯	50	—	—	—
耕 地 貸 付 非 農 家	35	130*	—	—
他 の 非 農 家	20	—	—	—
計	200	230	230	2.4

\*集落外の地主の土地も含む  
世帯数以外の単位はha 集落の資料と聞きとりによる

てみると、貸付ける側の地主は、集落内居住者の場合もあり、またドゥラック町の中心地区に住んでいる場合もある。なお、ここでいう地主とは、ルソン島の米作農村でみられるような大地主(梅原, 1992)ではなく、聞き取りによると最大で6~7haを所有している程度である。また第1表より、1戸あたりの平均経営規模をみると、全体で約2.4haと計算される。それを世帯のタイプ別にみると、小作農家(lessee)や自小作農家は割と規模が大きいが、それとは対照的に小作農家(tenant)の場合は平均1.4haにすぎない。農家タイプ間の格差が大きいいえる。

## (2) 世帯構成員の就業状況

次に、実際に調査を行なった世帯の就業状況について検討する。今回の調査(1992年8月)では、無作為に選んだ33戸で聞き取り調査を行なった。この調査は、筆者が現地でのワライワライ語を理解できないため、当集落在住のバラングイ・カウンセラー(集落相談員)1名を通訳に頼んで行なったものである。33戸の内訳は(第2表)、農家が23戸、非農家が10戸である。農家については3つに区分され、自作農家が7戸、自小作農家が3戸、そして小作農家が13戸とまとめられる。なお小作農家については、tenantかlesseeなのか判別できなかったので一括して扱う。また非農家についてみると(第2表)、農業労働者世帯が3戸、農地貸付・非農家が3戸、その他の非農家が4戸という状況であった。

調査の結果より、世帯構成員の就業状況をみると、まず全体として農業従事者が極めて多いことが明らかである。これには、すでに述べたように、自家農地での農業従事と他の農家に雇われて働く場合の2種類がある。第2表により明らかなように、後者の雇われ労働は、農業労働者世帯のみならず小作農家の場合にも顕著に認められる。その場合、労働者は一日当たり50~60ペソ(1ペソは約5円)の賃金を得て働いている。なお雇われ労働の日数については、農業労働者世帯の場合は、一人当たり年間100~200日程度である。また小作農家の場合には、雇われ日数にかなりの幅があり、最低で年間数日のみ、最高で100日程度という状況であった。

農業以外の就業形態としては、農作物の取引(集落内の農産物を集めて都市部まで運んで売ること等)や、ココヤシから採取されるチューバ・ワインの売買、あるいは薪の収集や販売等の、いわば1次産品関連の仕事に従事している例が多い(第2表)。それらは、農家と非農家の両方でみられる。それ以外の雇用機会は極めて限られており、自営のサリサリストア(雑貨店)の経営、乗り合いバイクやジプニー(乗り合い自動車)の運転手、あるいは学校の先生などが数例みられるにすぎない。ラウイス集落からタクロバンまでの通勤は不可能ではないが(バイクとジプニーを乗り継いで片道10ペソ)、実際には通勤者はほとんどみられず、結局当集落の就業はほとんど農村内で完結しているといえる。



第2表 ラウイス集落の就業構造 (1992年)

タイプ	No	世帯主世代		子供		他の就業者		同居家族数
		夫	妻	男	女	男	女	
自作農	1	(5)農業	54家事	(28)農業(25)鶏飼				7
	2	(53)農業・作物商	(47)家事・農業	(25)一				5
	3	(62)農業・雇農	(62)野菜商	(30)農業				4
	4	(35)農業	(27)先生					4
	5	(72)一		(27)鶏飼・農業	(43)先生		(27)美容師	7
	6		(62)産婦・農業		(33)(29)(25)(23)(21)家事	(36)航海士		9
	7	(32)薪売・雇農	(39)家事					7
自小作	8	(66)農業・作物商	(61)家事			(18)家事		5
	9	(49)農業	(50)家事	(27)農業				8
	10	(50)農業	(49)家事	(28)農業・雇農	(21)店員			10
小作農	11	(68)農業	(53)家事		(19)一			4
	12	(33)農業・雇農・ワイン商	(31)農業・家事					7
	13	(30)農業	(34)家事					6
	14	(39)農業	(39)家事					7
	15	(30)農業・雇農	(25)家事					4
	16	(52)農業・雇農・イモ商	(38)家事					6
	17	(42)農業・雇農	(42)家事	(20)農業(17)農業				8
	18	(71)農業・雇農・薪売	(65)家事	(37)農業・雇農	(26)一			6
	19	(72)大工・農業	(67)家事・サリサリ	(30)(28)農業	(25)家事			5
	20	(52)農業・雇農	(52)家事					3
	21	(60)農業・雇農	(38)農業・家事					5
	22	(34)雇農・農業・ワイン商	(30)家事					6
	23	(33)雇農・農業	(27)家事					5
農業労働	24	(34)雇農・ワイン商	(49)家事	(13)雇農				2
	25	(37)雇農	(33)家事					8
	26	(40)雇農	(42)家事			(?)雇農		6
貸付非農家	27	(45)乗合バイク	(51)家事・サリサリ					4
	28	(49)野菜商	(38)家事					3
	29	(27)ワイン商・鍛冶屋・雇農	(22)家事					6
他の非農家	30	(46)ドライバー	(36)家事・サリサリ					5
	31	(47)ジブニー・ワイン商	(49)家事					7
	32	(38)航海士	(23)家事					5
	33	(50)ワイン商	(37)家事・サリサリ			(14)家事		5

雇農：雇われ農業労働。

( ) 内は年齢，非就業者（老人・子供）は除いた

(聞きとり調査による)

## 5. 農業経営の実態

### (1) 農地の所有と貸借関係

本章では、農業経営の内容について検討する。最初に各農家の経営耕地の規模に注目してみると（第3表）、まず自作農家の場合は最大で7haであるが、他は1ha前後という例が多い。次に、自作かつ小作農家では、12ha、5ha、4.8haと経営規模は大きい。そして小作農家の場合はほとんどが0.5～1.5ha程度に集中しており、規模はあまり大きくない。このように、農家タイプによる違いが比較的明瞭にみられる。

第3表 ラウイス集落の農業経営

タイプ	No	所有耕地		借入 耕地	小作料	カラバオ		農具	化学肥料		農作業 雇い	農作業 雇われ
		貸付	自作			所有数	貸借		有無	作物		
自作農	1	7				3	貸あり	P・H	○	コーン・かぼちゃ	あり	
	2	4					借	P・H	○	いも類	あり	
	3	1.1					借				たまにあり	あり
	4	1				1		P・H				
	5	1					借					
	6	0.8					借		○	カラマンシー	あり	
	7	0.5										たまにあり
自小作	8	4	8		作物と金1/4	3		P3・H1	○	コーン・カラマンシー	あり(固定)	
	9	2	3		作物1/3	5		P・H				
	10	0.8	4		金1/2		借	P・H				あり
小作農	11	6			作物1/3	1	借	P・H			あり	
	12	3			作物1/4	(1)	年借	P・H	○	ナス・かぼちゃ		たまにあり
	13	1.5			金	1			○	かぼちゃ		
	14	1			作物1/3		借	P・H				
	15	1			金		借	P・H				あり
	16	1			作物または金							たまにあり
	17	1			作物1/3	2		P・H				たまにあり
	18	1			金または作物1/3			スベード				たまにあり (2人)
	19	1			金1/2							
	20	0.5			作物1/3	2	貸あり	P・H				あり
農業労働	21	0.5			金1/4		借		○	ほうれん草		あり
	22	0.3			金1/2		借					あり
	23	0.3			金1/5		借					あり
貸付非農家	24											あり
	25											あり(2人)
	26											あり(2人)
貸付非農家	27	2			作物1/3もらう							
	28	1					貸					
	29	1			作物1/3もらう							たまにあり

耕地の単位は ha

農具のPはプラウ(スキ), Hはハロウ(マグワ)

(聞きとり調査による)

小作料については、作物を納める例と現金で支払う例の両方がみられる(第3表)。多少のばらつきがあるものの、収穫物あるいは売上金の3分の1を地主に払っているという例が最も多い。フィリピンの小作制度の変容を分析した梅原(1992)は、中心的農業地帯では小作地は減少傾向にあり、分益小作制から定額小作制への移行が進んでいるが、その一方で周辺部では小作地は拡大傾向にあり、小作制度も分益制が依然として増大していると述べている。ここラウイス集落では定額契約は全くみられず、全て分益制であり、まさに周辺部農業の特性を示しているといえよう。

(2) 栽培作物

次に当集落の栽培作物についてみる。この地域では同一耕地で異種の作物を順に栽培

する輪作方式（ローテーション，地元ではintegrated cultivationと呼んでいる）がよくみられるため，ここでは，調査の時点における作付作物は何かという点を把握した。

第4表 ラウイス集落の農家の作付作物

農家番号	米		根 栽 類			果 実 類					野 菜 類						他	
	とうもろこし	ココヤシ	サツマイモ	キャッサバ	サトイモ	バナナ	パイナップル	マンゴ	カラマンシ	ジャックフルーツ	ナス	かぼちゃ	さげ	アスパラ	ピーマン	オクラ		ピーナツ
1	S	S	S	S	F	S	FS	F								S		3種
2	S	S	S	S		F		F		F		S						
3		S				F		F				S						
4	F	S			F	F		F				S						
5	F	FS	F															
6		S				F			S									
7		S																
8	F	FS	S	S	F	S		F	S			S	S			S		
9		F	S			F			S		S	S	S					
10		S		F	F	F		F			S							
11	F	S	S			S		S				S	S					
12	FS	S				FS			S	F	S	S						
13		S				F					S							
14		S			S						S			S				
15											S							
16		S																
17		S						F			S							
18		S	F	F		S	F	F				S						
19		S				S	F	F										
20		S				F		F			S			S				
21					F													
22	S	S																ほうれん草
23												S						

F：主に自家消費 S：主に販売 (聞きとり調査による)

第5表 各農家の作付面積が大きな作物

	トウモロコシ	ココヤシ	サツマイモ	キャッサバ	サトイモ	バナナ	パイナップル	カラマンシ	ナス	かぼちゃ	さげ	ピーマン	ほうれん草
作付が最大	7	5	1					1	3	1	4		1
2位	1	6	2	1		1		1	1	3	1	2	
3位	1	2	2	1	2	4	1		1		1		

単位：戸 (聞きとり調査による)

その結果が第4表にまとめられる。結局23戸の農家全体で計23種の作物を確認することができた。このように実に多様な作付がみられるところに対象地域の特性がある。これらの中で作付農家率が高いのは、ココヤシ(83%)、バナナ(61%)、トウモロコシ(43%)、パパイヤ(39%)、ささげ(30%)、サツマイモ、キャッサバ、ナス(以上26%)である。

なお、ここでは作物別の作付面積は把握できていないが、各農家の畑における作付面積が1位～3位の作物は第5表に示した通りである。これより推測すると、全体として作付面積が大きいのは、ココヤシ、トウモロコシ、そして野菜類であると考えられる。

次に、これらの作物が自家消費用かあるいは販売用かという点に注目すると(第4表)、特に販売される比率の高いのは、ささげ、なす、かぼちゃ、ピーマン、カラマンシー、ココヤシ、そしてサツマイモである。要するに野菜は全て商品作物である。農産物の流通についてはよく把握できていないが、野菜の場合は、集落内の野菜商(農業兼業が多いようである)が生産物を集めてタクロバンに運んで行って販売するというのを頻繁に繰り返している。また、サツマイモとキャッサバについては、収穫物全体の約6割は各農家がスライスしてチップにして乾燥させて家畜の飼料用として出荷する。これはセブの加工場に運ばれる。ちなみに、家畜の飼料用としてイモ類を加工するという技術は、1970年代に Visayan State College of Agriculture (略称 VISCA, 所在地はレイテ州バイバイ)が開発したということである。またイモ類の中でも人間の食用となる場合は、タクロバンへ運ばれて売買される。なおココヤシの流通については、この集落内にもコプラのミドルマン(仲買人)が3人おり、特定の農家と契約関係を持つということであったが、その内容については把握できなかった。

それから、耕作ローテーションの内容についてみると、色々なパターンがみられる。播種・植付けから収穫までに、キャッサバの場合は7～10ヵ月、さといもの場合は7～8ヵ月、そしてナスの場合は6～7ヵ月必要だが、その他のトウモロコシ、サツマイモ、米、かぼちゃ、ささげの場合は大体成育期間は3～4ヵ月である。先述したように、この地域では大体年間を通して降水があるために(第5図)、1年間で3回収穫することも可能である。その場合は、例えば、3～6月がサツマイモ、7～10月がトウモロコシ、11～2月が米というように3回耕作を繰り返している。なお、この村で現在栽培されているトウモロコシは、ミンダナオ島で急速に生産が拡大している(梅原, 1992)ハイブリッドコーン(イエローコーン)ではなく、ほとんどが伝統的なホワイトコーンである。

### (3) 農業生産技術

現在ラウイス集落では、トラクター等の農業機械は全く用いられていない。ここではスキ(plow)やマグワ(harrow)をカラバオ(水牛)にひかせて耕すのが一般的である。耕作のスケジュールを細かくみると、大体の作物の場合、①まずスキで3回ほど耕し、②次にマグワで整地してから、③播種・植付けに至る。その後、④1～2回hilling up(土寄せ)を行ない、⑤数回の除草を行なった後に⑥収穫する、というのが一般的である。この中で①②④の作業においてカラバオは不可欠である。そのため、カラバオの有無が各農家にとって非常に重要な意味をもつ。調査結果によると(第3表)、23戸の農家のうちカラバオを所有している農家は8戸に過ぎない(所有率35%)。もっとも、これには、1991年11月の台風により集落内のカラバオ約30頭が死んだという事情も関係し

ている。そして、第3表にみられるように、カラバオを所有していないほとんどの農家は、他の農家から一日契約でカラバオを借りている。この場合は、カラバオ+労働者1人+道具というワンセットで一日計100ペソが支払われている。今回の調査では、営農上の問題は何かという点についても質問してみたが、「カラバオがない・カラバオが買えない」と答えた農家が非常に多かった。これは、カラバオがいればもっと積極的な農業経営を図れるという気持ちの表われである。カラバオの値段は1頭15000ペソといわれる。かれらの1世帯あたりの食費は1月でおおよそ1000~2000ペソということであるから、カラバオ1頭は1世帯の年間の食費代に相当する。これは非常に高価な家畜であることがわかる。

それから最後に、化学肥料についてみると（第3表）、現在使用している農家は7戸で使用率はあまり高くない。その化学肥料は、野菜類やトウモロコシ、またはカラマンシー（柑橘果実）に、つまり商品作物に用いられている。

## 6. おわりに

以上述べてきたラウイス集落における調査の結果は、以下のようにまとめられる。まず世帯員の就業状況を見ると、農業（雇われ労働を含む）と1次産品関連の仕事に従事している例がほとんどであり、都市域への通勤者はほとんどみられない。また農業経営においては、耕地の貸借において定額契約はみられず、全て分益小作制であること、また、多様な作物の作付がみられるが化学肥料の使用率は低いこと、そして農業機械が全く用いられておらずカラバオ（水牛）の有無が非常に重要であること、等の特色が認められた。

今回の調査でみられたこのような諸特性は、フィリピンにおける他の研究事例（梅原、1992等）と比べてみると、どのように捉えたらよいであろうか。ラウイス集落でみられた分益小作制度の卓越、農業機械や化学肥料の普及率の低さ、そしてカラバオ依存の強さ等は、結局この地域の農業の「後進性」を示すものといえる。しかし同時に、商品作物としての野菜類やココヤシ等の栽培が活発にみられるのも事実であり、この地域を単に「遅れた」地域とステレオタイプに捉えてよいかどうか吟味する必要がある。

そのためにも、今後に残された課題は多い。これからは、今回の調査でほとんどふれられなかった農家の家計、農家間の人間関係、あるいは農産物の流通、それに伴う農家とミドルマンとの結びつき等について明らかにする必要がある。なお、ミドルマンとの特定の契約によって農民側に生じる弊害を取り除こうとして、1985年にはドゥラック町内の「生産者・商人組合」が、そして1987年にはラウイス集落の「農民組合」が結成されたという話が得られた。しかしその内容の詳細については把握できておらず、この点についても考察を深めなければならない。そして、こうした作業を通して、今後フィリピンの周辺地域農村の特質を浮き彫りにしていきたいと考える。

## 謝 辞

現地調査においては、ラウイス集落のキャプテンをつとめる Dionesio Coronado 氏、カウンセラーの Teofilo Magos 氏、Romeo Ranca 氏に特に御世話になり、また多くの村人に暖か

くもてなしていただいた。またタクロバン市では、フィリピン国立大学タクロバン分校長の Zosimo Lee 博士に御協力をいただいた。以上の方々に厚く御礼申し上げます。なお、本稿の骨子は、1992年度人文地理学会大会で発表した。

#### 参考文献

- 梅原弘光 (1978) : フィリピンにおける「緑の革命」と農民—中部ルソン, ヌエバ・エシハ州の一村落事例を中心として—。アジア経済, 19-9, 26-40 p.
- 梅原弘光 (1992) : 『フィリピンの農村—その構造と変動—』古今書院, 473 p.
- 大崎正治 (1987) : 『フィリピン国ボントク村—村は「くに」である—』農山漁村文化協会, 231 p.
- 岸本修編著 (1984) : 『熱帯農業入門』古今書院, 149 p.
- 国際農林業協力協会編 (1987) : 『フィリピンの農業—現状と開発の課題—』国際農林業協力協会, 232 p.
- 高橋彰 (1969) : バリオ・カトリナン—フィリピンの米作農村—。大野盛雄編著『アジアの農村』東京大学出版会, 37-115 p.
- 高谷好一 (1985) : 『東南アジアの自然と土地利用』勁草書房, 291 p.
- 滝川勉 (1989) : 1980年代フィリピン農村における商品経済の進展と土地所有の変化。梅原弘光編著『東南アジア農業の商業化』アジア経済研究所, 5-33 p.
- 永野善子 (1983) : 中部ルソン糖業地帯の土地所有と農村構造—パンパンガ州バスデフ地区の事例—。アジア経済, 24-3, 13-48 p.
- 堀井健三編 (1992) : 『地域研究シリーズ5・東南アジア経済』アジア経済研究所, 296 p.
- Center for Research and Communication(ed.)(1988) : *Philippine Agribusiness Factbook and Directory 1987-1988*. Center for Research and Communication, 390p.
- National Statistics Office(1990 a) : *Provincial Profile -Leyte-*. National Statistics Office, 250p.
- National Statistics Office(1990 b) : *1990 Census of Population and Housing, Report No. 2 - 51(Leyte)*. National Statistics Office, 39p.
- Quianco M. B (ed) (1983) : *The Philippine Recommends for Cassava*. Philippine Council for Agriculture and Resources Research and Development, 62p.
- Tobinga, G. A. and Gagni, A. O. (1982) : *Root Crops Production in the Philippines*. Department of Development Communication, UPLB, 69p.
- Vitug, V. V. etc. (eds.) (1988) : *Agribusiness Opportunities*. World Media Groove Ins., 536p.

英文要旨

On the Occupational Composition and Agriculture Management  
in Rural Village of Leyte Province, Philippines

Kazuhiro AJIKI

The purpose of this paper is to clarify the occupational composition and agriculture management in rural village of Leyte Province in the Philippines. Barangay Rawis in the Municipality of Dulag was chosen for a field survey, and the survey was carried out at August in 1992. The number of sampled households was 33 in all.

The results of that survey can be summarized as follows. Firstly, almost workers are engaged in agriculture or some kinds of small agribusiness. Therefore, there are few workers commuting to urban area.

Secondly, some specific features were found in their agriculture management. ① There are no case of contracts with fixed money between land owners and tenants. All of them share crops or income. ② Many kinds of crops were observed on their farms, however, only a few farmers use commercial fertilizer. ③ In the Barangay, there are no agricultural machines such as tractor. On the other hand, buffalo plays a very important role in cultivation. Finally, these features can be thought as indexes of the so-called 'backward' condition of their agriculture.